68 大沢宿〜今市宿

栃木県日光市
水 無 〜 森友用水
（ 歩行距離 2748m 35分 ）

歩く地図でたどる日光街道
http://nikko-kaido.jp/
JZE00512@nifty.ne.jp

森友の信号から右の杉並木へ

森友の信号を過ぎるとすぐ右に杉並木街道がある。一方通行で車が少ないので安心。

121号線の交差点

横切る121号線は板橋バイパスで、左へ行くと日光宇都宮道路、土沢インターチェンジに行く。

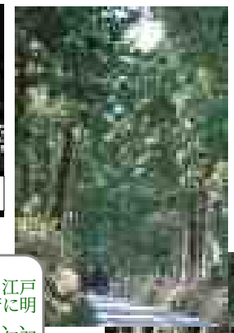
来迎寺

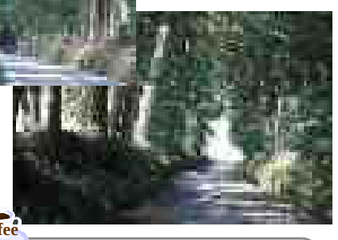
⑤来迎寺
「東の方に来迎寺と云浄土宗の寺あり」（日光駅程見聞雑記）
永正14年（1517）全暁の創建という浄土宗のお寺で今市宿の如来寺の末寺。斎藤嘉平墓（下野森友村の名主。明治元年7月12日佐賀藩兵に殺害された。）がある。参道には享保21年（1736）安永2年（1773）などの四基の十九夜観音が並ぶ。

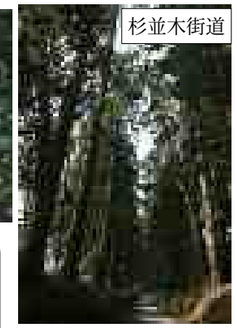
一般道に出る

下森友の信号、右に行くと奥州道、左に行くと板橋道（この先121号線が新しい板橋道のバイパス）を過ぎ、左に古民家酒房菜音、右少し行った所に来迎寺がある。交通量は結構多い。

第貳接台井






杉並木街道

馬頭観音

119号線は左、杉並木は右へ

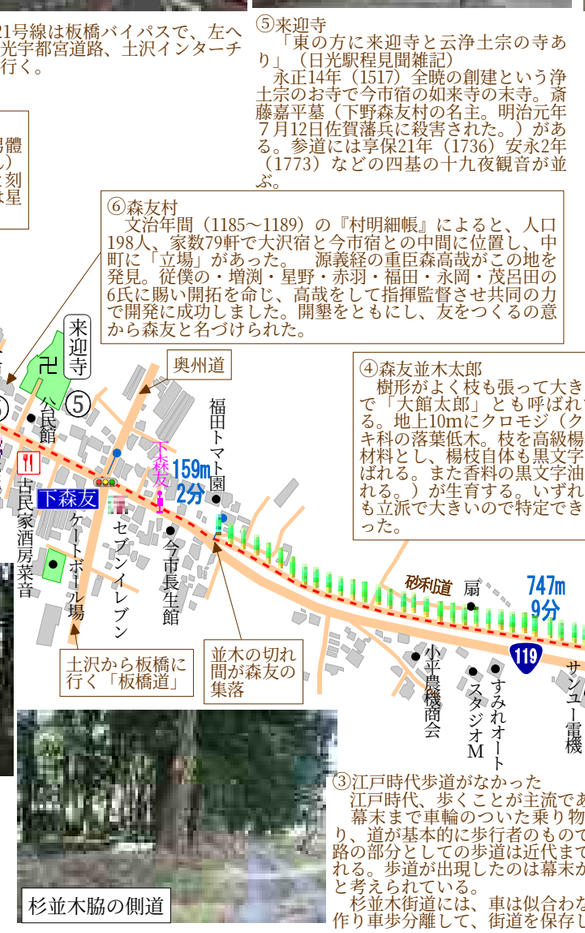
今まで119号線の狭い道を歩いてきたが、ここで119号線と分かれて砂利道の並木道は右へ入っていく。この杉並木街道も鬱蒼としており、日射しの強いときには、ほっとすることだろう。

歩道が狭いので危ない

杉並木脇の側道

火の見櫓の先から杉並木

下水無交差点



③江戸時代歩道がなかった
江戸時代、歩くことが主流であった。
幕末まで車輪のついた乗り物が例外的な存在であり、道が基本的に歩行者のものであったことから、道路の部分としての歩道は近代までなかったものと見られる。歩道が出現したのは幕末から明治初期にかけてと考えられている。
杉並木街道には、車は似合わない。ぜひバイパスを作り車歩分離して、街道を保存したいものです。

①水無
「村名の起こりは、むかしより名主清兵衛が宅地に古木の梨樹あり。囲壱丈許、其実甘美にして水気多してと、土人水梨と呼びしより村名をも水梨と唱へしといふ。おぼつかなき説なれども、梨樹は文化4年（1807）居宅類焼のとき余焔にやかれて枯たり」（日光道中略記）名主清兵衛宅に大きな梨の木があり、水分の多い梨がなるので「水梨」とよばれ、それが「水無」になったという説。もう一つは、かってこのあたりの水利が悪く畑地ばかりであったという説。また、弘化4年（1847）の『宗門人別帳』によると、水無は総家数20軒、人口98人。村には日光街道往還掃除人足が課せられていた。

②火の見櫓の歴史
慶安3年（１６５０）幕府直轄の「定火消」が作られ、江戸城と武家屋敷の防備にあたり、万治元年（１６５８）から火消役が火消屋敷に常駐するようになり、このときに作られた高さ５丈（約１５m）の火の見櫓が日本最初と言われている。見張り番が常駐する火の見櫓は後の消防署に置かれる火災監視塔「望楼」へと発展する。一方、町火消しは消防団へと発展する。消防団は全国に２４００以上存在する市民によるボランティアの消防組織で、その火の見櫓は半鐘を鳴らし、火災を知らせる機能が中心になり、ポンプ小屋とセットになっていることが多く、人が常駐する施設ではない。

明治初期の火の見櫓は木製のはしごと半鐘だけの簡素なものが多かったが、明治末ごろから鉄製の火の見櫓が造られるようになる。しかし昭和１４年以降、消防団は警防団になり、空襲警報も鳴らすようになるが、鉄の供出により取り壊されたものも多い。戦後間もなく再建されるようになり、昭和３０年代後半にかけて急増し最盛期を迎える。

coffee time 小山付近の戦い

西郷隆盛・勝海舟会談により江戸開城が決定し、江戸城が新政府に明け渡された慶応4年（1868）4月、憤慨した旧歩兵奉行大鳥圭介は伝習歩兵450名を引き連れ下総市川国府台に向かった。伝習隊とはフランス軍事使節団から訓練を受けた旧幕府陸軍の精鋭部隊で、ここに歩兵七聯隊や桑名藩兵も加わったので総勢二千余名の軍勢となった。軍議を開き総監に大鳥、参謀には新撰組土方歳三が就き日光への進軍を決めた。
多勢での進軍は人馬・宿泊に支障が出ると判断した大鳥は、隊列を二派に分けた。土方率いる前軍と大鳥率いる中後軍とである。前軍は下野芳賀郡に向かい、中後軍は下野小山宿に入った。宇都宮には新政府先遣隊が布陣していたから、下野での戦争が不可避となった。４月16・17日、小山宿で中後軍は待ちかまえた新政府軍と砲火を交えた。小山付近の戦闘は、次の四度にわたった。①16日午前、旧幕府別隊（旧幕府三隊）対平川支援　②同日午後、大鳥軍本隊対祖式支援　③17日午前、大鳥軍本隊対香川本隊　④同日午後、大鳥軍本隊対祖式支援

coffee time 天狗党争乱

元治元年（1864）4月、故水戸藩主徳川斉昭を指す「従二位増大納言源烈公（じゅにいぞうだいなごんみなもとのれっこう）」と書かれた白木の神輿を担ぐ150〜60の武装集団が、矢田貝（現在の真岡市）から上三川（河内郡）を経て宇都宮に進軍してきた。彼らは斉昭の進めた藩政改革が挫折し、藩内抗争へと発展する中で生まれた激派グループで天狗党と呼ばれた。水戸学に基づく尊王攘夷思想により、幕府の開国政策に反対し桜田門外や坂下門外のその変に関係したが、藩内では孤立化したためやむなく筑波山に挙兵、同志を増やす目的もあって下野に進軍してきたのである。
目指すは日光。神廟（しんびょう）にて「攘夷の先鋒」たらんことを祈願し、そこてを拠点にして横浜鎖港（さこう）に打っ出る構想を抱いていた。しかし日光では館林藩などの諸藩警備兵や日光奉行所率いる猟師鉄砲隊に阻まれて、今市に部隊を止めざるをえず、総軍して日光社参という要請も拒否された。宇都宮藩家老県信次郷（あがたのぶつぐ）が仲介にはいり、10人交代で東照宮を参拝するという惨めな結末となった。そのため栃木の大平山を滞在の拠点に変更し、やむなく今市を去って行ったのである。

coffee time 戊辰戦争聖地を巡る攻防

深山幽谷に囲まれた聖地日光は、寺社の付属施設が石垣で囲われ、参詣する諸大名の宿坊も揃っていたから軍事拠点にもなりうえた。そのため、天狗党や戊辰戦争など幕末の政治混乱期には、軍事集団が長期間占拠し滞陣するには好都合な場所として狙われた。
軍事占拠にさいしては、東照大権現を祀る聖地掌握が大義名分とされた。また、日光山を統括する輪王寺の宮が門跡（皇族の子弟が跡を継ぐ寺）であったために、尊王攘夷運動が激化すると渦中に巻き込まれやすい政治条件があった。坂下門外の変では、下野の草莽（そうもう）の志士たちが挙兵時のシンボルとして宮の擁立を画策（かくさく）したように、日光山が新たな政治的意味合いを付与される状況にもあった。そのため、日光道中をはじめ、日光に通じる道筋は幕末に入ると俄然（がぜん）緊張感をはらんでいった。

coffee time 今市攻防戦

日光へ敗走する旧幕府軍を追って、新政府軍も日光道中や例幣使道・壬生通りを北上したため、日光が戦場となる危機が迫った。
旧幕府軍の進駐により、日光は混乱を極め、市中は歩兵の乱暴が目立った。
新政府軍の中核は土佐藩兵で、指揮は板垣退助・谷守部（干城 たてき）・片岡健吉など、後に明治の政治家として名を残す錚々たる面々であった。
4月29日、土佐軍が二手から今市に到着、日光に向け進軍した矢先、瀬川十文字で最初の交戦となった。
小休止時に、日光山総代の命を受けた2名の僧が土佐藩陣営に駆けつけ、日光進軍の中止を願いでた。日光を兵火から守ろうとする訴えであった。
そのようなこともあってか、旧幕府軍も前軍退却を決断し、六法沢越えで栗山から会津領田島へと行軍していった。
この日、日光奉行新庄右近将監（しんじょううこんしょうげん）は栗山村に逃亡し、日光は新政府軍の支配下に入った。
一方、会津田島では旧幕府軍に会津藩兵が加わり、新しい陣容となった。
幕連合軍は会津街道を南下し、再び日光領に入り鬼怒川を挟んで新政府軍と対峙した。
4月から6月にかかる日光山麓の戦いは、計6、7回の攻防があったが、なんといっても激戦は閏4月21日と5月6日の二度にわたる今市宿攻防戦であった。
ともに新政府軍の勝利となったが、特に最大の激戦となった第二次攻防戦は、梅雨とかち合い連日の長雨と大谷川増水のなかで戦われた。
会津軍は第一次攻防戦の失敗から、本営を今市に近い小百（こびゃく）に集め再挙を図った。
しかし、梅雨のため大谷川の渡河に苦しみ、土佐藩隊も再度の攻撃に備えて野戦陣地の強化につとめ、夜は宿のあちこちに篝火を焚いて兵威を示す野営生活のため、両軍兵士の疲労は激しかった。
結局物量に勝る新政府軍の勝利に帰したが、攻略に失敗した会津軍は、以降藤原口の持久防衛に戦術を転換し、戦局も奥州白川口を巡る攻防へと移行していった。
攻防が長期戦となったことで、地域の民衆にはさまざまな負担が課せられた。
今市宿近郊の村々には、土佐藩から篝火用の薪や鍬の献納が命ぜられ、杉並木が大量に切られた。
軍夫の徴発もあり、戦争の巻き添えになったものもいた。猟師などは両軍から鉄砲隊に組織されたが、民衆にとって最大の不安は戦火で家を焼かれることであった。
焼き討ちは新政府・会津軍とも行った。
特に鬼怒川左岸では、会津藩の本陣になったという理由で盛んに焼き討ちが行われた。
「いくさは会津　鉄砲は歩兵　火付けは土州（土佐藩）にとどめさす」と歌われたように、一連の行為は地域民衆の胸中に沈殿し、永く語り継がれていった。

coffee time 宇都宮の戦い

土方歳三率いる前軍は、4月18日下館を発して谷田貝町へ入った。その途次、下妻藩や下館藩城下の通過にあたっては、軍事力を誇示し、強談の末に家臣10名を強制的に従軍させたり、藩主逃亡という情勢を利して兵糧を拠出させるなど兵力と兵糧の確保を図りながらの進軍であった。
宇都宮で大鳥中後隊と会同し、日光に進行する予定であったから、宇都宮城を攻略する必要があった。
なんといっても宇都宮は日光の門戸をなす地として、北関東の戦略的要所であった。
行軍してきた1200の土方隊は、芳賀郡下の村々に1500人余の人馬継立てを命じ宇都宮攻撃の準備をした。
同夜、鬼怒川を渡河し、東蓼沼村（現在の上三川町）満福寺を本陣とした。19日、出陣に際して下総関本河岸（茨城県筑西市）で捕縛、連行してきた3名の黒羽藩斥候を軍神への手向け（たむけ）として打ち首にした。
城下へは、いくつかの隊列に分かれて進行したが、簗瀬村（宇都宮市）に入った一隊が兵火を放った。
南風強く瞬時にして大火となったが、その間隙を縫って城下になだれ込み、新政府軍・宇都宮藩兵などを打ち破り占領した。
当時、城下戸数は3000、内2400戸が焼失したといわれる。
二荒山神社は焼失し、宇都宮城も落城にあたり退却する藩士により火が放たれ、延焼を免れたのは材木町など1，2を数えるのみであった。
小山の戦いで勝利した大鳥隊は、壬生から鹿沼に向かっていたが、宇都宮戦争の知らせを得て一路宇都宮に向かった。
目のあたりにした城下は人影もまばらで、硝煙がくすぶる城内は敵・見方とも不在であった。
土方軍は再び東蓼沼村に戻っていたし、宇都宮藩士と藩兵はばらばらになりながら館林藩へ逃避行し、新政府軍も総督府に援軍を求め日光道中を南下した。
宇都宮を巡る第二次攻防はすぐやってきた。
総督府は鳥取藩や土佐藩・大垣藩などからなる諸藩救援軍を壬生藩に結集させた。
そのため姿川を挟む栃木街道沿いの安塚（現在の壬生町）と幕田（現在の宇都宮市）が戦場となった。
4月21日、両軍は姿川を挟んで布陣し、夜半から翌22日にかけ、雨中激しい戦闘が繰り広げられた。戦闘は白兵戦あり火兵戦ありで、刀剣・槍などによる戦闘と鉄砲や四斤山砲（しきんさんぽう）による銃撃戦とが入り乱れた。
戊辰戦争を軍事史的にみると「白兵戦から火兵戦に移る過渡期」（大山柏『補訂戊辰役戦史』）と位置づけられているが、安塚の戦いはその典型といえよう。
この戦いに勝利した新政府軍は薩摩・長州藩などの救援軍を増強して、栃木街道を北上、23日の六道辻（現在の宇都宮）の戦闘で優勢となって宇都宮城を奪還した。
城内にいた旧幕府軍は、二荒山神社から八幡山に退き反撃したものの、劣勢は明らかとなり日光に落ち延びていった。
土方などは怪我を負っての行軍であり、戸板に乗せられ運ばれる者も多数いた。
宇都宮の戦いを大局的にみれば、たとえ軍事史的には近代的な戦闘方法への端緒ではあっても、旧幕府軍の戦術をみると、軍神への手向けか民衆への砲火・焼討ちという手段、あるいは城攻めなどは、まさに中世以来の武士の戦闘方法そのものであった。
小山宿での戦いも人家への放火という行為はあったが、宇都宮攻防は被害の大きさからみて、戊辰戦争における戦闘方法の原型をなし、旧幕府軍の敗退という結果は、その後の帰趨（きすう）を占うものとなった。